

大学生の力を活用した集落復興支援活動

事業代表者 工学研究科・教授・三橋 伸夫

構 成 員 福島県企画調整部地域振興課・主事・戸倉 毅

1. 事業の目的・意義

平成 25 年度、26 年度の 2 年間にわたり、福島県の「大学生の力を活用した集落復興支援事業」を通じて、農村集落活性化に建築計画研究室の学部 4 年生、大学院生とともに取り組んだ。平成 27 年度の本事業の目的は、これまでの 2 年間の活動をふまえ、農村集落の活性化を含め当該地域の抱える課題に対してより有効な対策を講じることである。対象である二本松市水舟集落は、東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴い、放射能汚染の恐れから農業生産に支障が生じていた。従来からあった少子高齢化に加えて農業生産の停滞をどう克服するか、活性化を検討し行動を起こすことが目的である。また、この事業は、参加する学生の地域対応力、コミュニケーション力の向上につながることを期待される。

2. 事業内容および事業の進捗状況

(1) 全体活動スケジュール

今年度二本松市水舟において行った活動は表 1 の通りである。

表 1. 平成 27 年度活動スケジュール

日付	内容
2015 年 8 月 22 日 ~23 日	・農家民泊、ヒアリング ・郷土料理（夏季）の発掘のためのワークショップ ・案内看板に関するワークショップ ・グラウンドゴルフ大会
2015 年 12 月 5 日 ~6 日	・農家民泊、ヒアリング ・郷土料理（冬季）の発掘のためのワークショップ ・案内看板製作 ・野菜収穫体験
2016 年 2 月~3 月	・パンフレット作製

(2) 夏の農家民泊とヒアリング（写真 1）

2015 年 8 月 22~23 日に農家民泊体験を行った。5 軒の農家で民泊を実施し、建築計画研究室教員・学生 9 名と社会人 3 名（研究室卒業生とその

友人）の計 12 名が宿泊した。今年度の民泊では、宇都宮大学学生のみならず、都市部からの社会人も参加し、農家の生活に触れた。宿泊者の対象が広がった。

昨年度と同様、各世帯を対象に農家民泊に関するヒアリング調査を行った（表 2）。意見として、民泊に対しての期待が多い反面、依然抵抗感を抱く人も見られた。外部の人を迎えるにあたって、何かしらの準備を特別にしている家庭が多く見られた。また集落住民の日常生活の様子が窺えた。民泊を終えた際の意見としては、楽しさを感じる反面、精神的な負担も感じていた。農家民泊を今後続けていく事には積極的であり、具体的な提案が見られた。



写真 1. 農家民泊の様子

(3) グラウンドゴルフ大会（写真 2）

前年度同様に、集落住民の集まる機会を作るという目的で、グラウンドゴルフ大会を開催した。約 35 名の住民が参加し、住民同士や学生らとさまざまな交流の場面が見られた。

(4) 郷土料理（夏季）の発掘ワークショップ（写真 3, 4）

昨年度の活動から、民泊に対して、特に女性に抵抗意識があることがわかった。その理由として

表 2. ヒアリングで得られた意見

時期	項目	回答
民泊中	民泊に対して期待していたことは？	・どんな人が来るのか楽しみにしていた・若い人との交流・普段できないような話
	抵抗、気がかりだったことは？	・仕事との両立・料理を出すこと・抵抗を感じなくなってきた・食べ物の好き嫌い
	特別に準備したことはあるか？	特になし・豪華な料理・家の掃除・お酒
	村の魅力、好きなところは？	・みんな仲が良い・毘沙門・幡祭り
	普段生活の趣味は？	酒・バイク・ダンス・ゴルフ・孫たちの成長
	得意自慢の料理は？	旬物の天ぷら・かぼちゃのサラダ・ザクザク汁
民泊後	良かったこと、楽しかったことは？	話をたくさんできた事・若い人との交流
	大変だったことは？	仕事との両立・料理の提供・来る人が予定と違った事
	当初の民泊のイメージと比べてどうか？	慣れてきたので特に変わらない
	民泊に関して地域住民と話すことはあるか？	他の家にも薦めている・ほかの家の人は抵抗を感じている
	今後継続して行っていきたいか？	できるだけ継続していきたい・宇都宮大学以外の人も呼びたい
	今後宿泊者側に求める事とは？	気を遣わないで来てくれること・女性にも積極的に参加してほしい

「どんな料理を出せばよいかわからない」、「料理が口に合うか不安」など、料理に関する意見が多く見られた。そこで今年度は、地域資源の発掘も見据え、民泊で食事のメニュー例となり得る郷土料理の発掘のためのワークショップを行った。8月23日に行われた郷土料理発掘ワークショップでは、実際に郷土料理を作ってもらい、調理した住民に作り方や、どんな食材を使ったのか、どんな時に食べたのかなどを発表してもらった。後日、発表内容を郷土料理のレシピシートとしてまとめ、各世帯に配布した(図1)。

(5) 案内看板に関するワークショップ(写真5)

昨年度までに作成した集落散策マップの活用を目的に看板製作のためのワークショップを行った。



写真2. グラウンドゴルフ大会



写真3. 郷土料理発掘ワークショップ



写真4. 郷土料理発掘ワークショップ



ジャガイモ餅

お年寄りの方より食べて頂きました。ジャガイモ餅1年中保存している野菜なので、食料に困ったときも食べて頂けます。おやつとしてもご飯のおかずとしても、アレンジ次第でどんなおかずでもおいしく食べることが出来ます。

- ※ペーパーで包んで上に乗せをのせて電子レンジで焼く。
- ※後で焼いて、ケチャップをかけてお好み。(おにぎりを入れて焼くのもおいしかったです！)
- ※砂糖・醤油・マヨネーズ・肉味噌・味の素・お好み調味料をのせて焼くお好みでも美味しくいただけます。

お年寄りを呼び付けて頂くことが大切です！

材料	つくり方
ジャガイモ 大6個 片栗粉 0.5カップ~1カップ サラダ油 大さじ2杯 みたらしだれ しょうゆ 大さじ3杯 水 2cup 砂糖 大さじ1杯 片栗粉 適量	① ジャガイモは皮付きのまま縦を4等分し、裏がスーッと刺さって割れるくらいに火を通す(皮を剥いても可)。② 油を熱くし、お芋を入れた。お芋が焦げ付くまで焼く。③ お好みの大きさに切る。④ ぶた付きのフライパン(ホットプレートでもOK)にサラダ油を熱く、お芋は②のりと焼き色が付いたら裏返し焼きにする。⑤ 片栗粉にみたらしだれを塗り、④にかけ、お芋が焦げ付くまで焼く。⑥ 完成品は⑤を冷ましてから食べる。

図1. 郷土料理レシピシート(例)



写真5. 看板に関するワークショップ

案内看板に関するワークショップは、参加者約35名を4つのグループに分けて行った。出された意見をまとめると、散策マップについて、看板設置場所について、看板の内容について、その他の4つに分けられる。散策マップについては、「昔の道や使わない道はないほうがわかりやすい」「細道と太道を分ける」「集落南部の境界線が誤り」などの意見が見られた。看板の設置場所については、どのグループでも「県道との境」「出入りに案内図があると良い」などの意見がでた。また、「毘沙門堂」や「散歩コースの分かれ道」にも看板を設置したほうが良いという意見も見られた。看板の内容については、「案内図」や「距離の標識」などの意見があった。これらの意見にもとづき、マップの修正と看板の設置場所、内容の検討を行った。

(6) 冬の農家民泊とヒアリング (写真6)

2015年12月5～6日に農家民泊体験を行った。3軒の農家で民泊を実施し、研究室学生8名が宿泊した。夏と同様に各世帯を対象に農家民泊に関するヒアリング調査を行った(調査結果は略)。

意見として、夏季と同様の期待がもたれている反面、抵抗感が薄れてきている。また、今後民泊を広げていく方法に関して、具体的な提案が多く出た。民泊実施後の感想としては、民泊自体が楽しただけでなく、住民の意識の変化に喜びを感じている意見があった。しかし、依然、仕事との両立が困難であるという意見があった。

今後について、農業の大変な部分の体験など、具体的な提案が得られた。



写真6. 農家民泊の様子

(7) 案内看板の製作 (写真7)

夏に行った案内看板に関するワークショップでの意見をもとに、マップの修正と看板の設置場所、内容の検討を行ったのち、実際に看板の土台の製作を行った。製作にあたっては大工(住民)の方の指導のもとに行った。看板の設置場所は、集落の出入り口付近と毘沙門堂前の3か所とした。内容については図2に示す。



写真7. 看板製作の様子



図2. 看板の内容 (一部)

(8) 郷土料理 (冬季) 発掘ワークショップ (写真8)

12月6日に冬季の郷土料理の発掘のためのワー

クショップを行った。約45名の方が参加した。今回のワークショップでは、特に女性の方が中心となってメニュー決めや会議を行っており、女性の方の集落活性化への意識が改善されている様子が窺えた。また、夏と同様に郷土料理をレシピシートとしてまとめた。

(9) 野菜収穫体験 (写真9)

耕作放棄地となっていた畑にサトイモを植え、収穫体験を行った。また、収穫したサトイモは郷土料理の材料としても使用した。

(10) パンフレット作製 (図3)

今後、一般の参加者受け入れのために水舟集落を紹介するパンフレットを作製した。内容は集落の紹介、農家民泊受け入れ世帯の紹介、料金、イベントスケジュール、アクセスマップなどの情報を記載し、一般の方に水舟集落の魅力が伝わるようなパンフレットを作製した。このパンフレットは近隣の道の駅などの公共施設や店舗に配布する予定である。

4. 事業の成果

農家民泊の実施を梃子にして集落の交流人口をふやし、併せて、特産品開発や耕作放棄地の縮小などを図り、集落住民の方々の暮らしの活性化と集落到住む誇りを取り戻そうとする試みはいくつかの成果を生んでいる。

第一に、農家民泊を実施する戸数が5戸に増え、宿泊者も学生から社会人へと拡大したことが挙げられる。第二に、民泊実施上の隘路の1つであった食事提供の標準化を企図した郷土料理の夏・冬メニューの検討を行うことができ、これは同時に住民の日常生活の見直しともなったことである。第三に、グランドゴルフ等の交流イベントの他に、野菜収穫体験、薪割体験など農家の暮らしを体験するメニューを検討したことである。そして、第四に交流をより活発化させるため、案内看板の設置とパンフレットの作成を行ったことである。これらの取組を通じて、住民の方々の積極性が次第に増してきていることを実感する。

5. 今後の展望

3年間の取組をさらに発展させるべく、宇大峰が丘祭への住民の方々の参加(交流・野菜等販売)を検討している。また、一般都市住民を対象とした農家民泊と体験・交流活動のいっそうの発展を期して、大学との交流・連携活動は継続させていく予定である。

末尾ながら、今年度の取組でお世話になった二本松市の行政担当者、ならびに水舟集落の皆様方にお礼申し上げます。



写真8. ワークショップの様子



写真9. 野菜収穫体験の様子



図3. パンフレット内容